



# 法の水茎

大正大学講師 高橋 秀城

(69)

咲きし時  
猶こそ見しか  
桃の花  
散れば惜しくぞ  
思ひなりぬる

〔拾遺集〕不知

（咲いた時に、心惹かれた桃の花よ。散ってしまったので、愛おしく思うようになったよ）

梅や桜と並んで、桃の花も春を代表する植物です。古くから日本に渡来し、春を告げる花の一つとして、多くの人を魅了してきました。

桃は、柳や石櫛とともに邪気を払う力がある木としても信じられてきました。三月三日の雛祭が「桃の節句」と呼ばれるのも、こうした意味が込められています。

薄く濃く  
今日咲き合える  
桃の花

酔ひをすすむる  
色にぞ有りける

〔永久百首〕藤原仲実

（薄く濃く、咲き合っている桃の花よ。酔いを契める色であるよ）

この歌には、桃と酒とが組み合わされています。美しく咲きほころぶ花を愛でながら飲む酒は、もしかすると桃の花を盃に浮かせた「桃花酒」でしようか。病を取り除く仙木と寄り添い、酒を酌み交わす光景は、まさに桃源郷といった装いです。

冬ごもりの虫が這い出る啓蟄を過ぎれば、七十二候の「桃始笑」が巡ってきます。今年も三月十一日。東日本大震災発生から八年目に入るこの日、高尾山薬王院では「高尾山火渡り祭」が執り行われます。悪鬼を払い平和をもたらす桃のように、

修験者を先達として世界平和が一心に祈られます。さてこれまで、仏教で説く六つの世界（六道）の中から、「地獄」「餓鬼」「畜生」を見てきました。今回はその上の「修羅」を覗いてみたいと思います。

現代では、「修羅」と聞くと「修羅場」（激しい争いが行われる場所）という言葉が思い浮かぶ方も多いでしょう。鎌倉時代の説話集に「闘争を企てて戦いを好む者は、修羅道に堕ちて苦しみを受けることになる」（無住「妻鏡」と記されています）。

「修羅道」は、先に挙げた「地獄」「餓鬼」「畜生」の「三悪道」に対して「人」「天」とともに「三善道」の一つと言われます。ただ、争いの絶えない世界だからでしょうか、「三悪道」に加えて「四悪趣」（四悪道）に含まれる場合もあります。

では、修羅（阿修羅）とは、どのような姿をして

ているのでしょうか。平安時代中頃の物語に、阿修羅と出会った際の様子を語られています。

清原俊隆という男が、大きな山の峰から眺めてみると、山頂が天に突くほどの険しい山が見えました。俊隆の気持ちは高ぶり、足を急がせてやつと山の頂に辿り着いて辺りを見渡してみれば、千丈（約三千メートル）下に見える谷底に根を張り、木の先は空を突くほど高く、枝は隣の国にまで伸びた桐の木を切り倒して、細工を施している者がいました。



高尾山火渡り祭で祈りを捧げる修験者

その者の髪の毛を見たら、何本もの剣を逆立てたようでした。顔は燃え盛る炎のように真っ赤で、手足は鋤や鍬のように堅く、眼は金属のお椀のようにキラキラと輝いています。たくさん女性や老人、子供や孫を引き連れて、皆で木を切っていました。

阿修羅は俊隆を見つけ、怒りの形相で言うには、「お前は、どうしてここに来たのだ。阿修羅の万劫（とてつもなく長い時間）の罪の半分を過ぎるまで、虎、狼、虫けらと雖も、人の世に近いものに寄せ付けず、この山にやって来る獣は、阿修羅の餌食とせよと決められているのだ」と、眼を車輪のようにぐるぐる回し、歯を剣の刃の様にむき出し

## 折り折りの記 (103)

波多野 重雄

### 赤い椿谷の傾くままに落つ

高尾山の六号路の露出する石段と太い樹根の階段を越えると、赤い落椿が整然と並ぶ。花を上に向け落花の順序に「赤い椿帯は圧観」

ふと、碧梧桐の「赤い椿白い椿と落ちにけり」の句をおもふ。子規は「碧梧桐の特色とすべき所は極めて印象の明瞭な句を作る」と示唆。

また、子規は明治二十五年、大学中退後日本新聞に入社し、内藤鳴雪と高尾山に遊んだ。その碧梧桐を師と仰ぐ瀧井孝作先生は生前、八王子市の名誉市民であり、芥川賞の銚衡（選考）委員で稀有な因縁である。

（高尾山健康登山の会々々長

### 春季大祭

時に火に

厚木市 荒井 一雄

#### 柴燈護摩舞 火龍

火龍様は舞ひ、

#### 本堂護摩舞 金龍

大本堂の護摩壇に金龍様は舞ふ、

#### 飯繩権現 大欣喜

ご本尊飯繩大権現様は大いに

#### 蛇滝壺中舞 青龍

（仏法を拝聴するが如く大に喜び、蛇滝の滝壺の中に青龍様は舞ふ、

して怒ったのでした。俊隆は涙を流しながら父母と手を取り合せて別れた日から、今日までのことを詳しく話しました。すると阿修羅は、「我らは昔罪業が深かったために、このような醜い身を受けたのだ。だから、忍辱（苦しみ）に耐え忍ぶこと」の心など持っていない。だがそうはいっても、身内を愛おしく思う気持ちには同じだから、特別にお前の命を許してやろう。すぐにここから立ち去って、阿修羅のために、大般若経（玄奘三蔵が訳したとされる六百巻にも及ぶ経典）を書写して、我々を供養するのだぞ。お前に、父母の許へ帰るきっかけを与えてやろう」と言うのでした。

（宇津保物語）

阿修羅は、前世での悪業によって修羅道に堕ちました。この話の中で、「忍辱の心」と見えますが、静い心から起る如みや憎しみによって、相手



### 前貫首・山本秀順大和尚の命日

浅ましや 荒磯に

（栃木北部教区普濟寺）

二月四日は、前貫首・山本秀順大和尚の御命日であります。歴代先師墓地において、懇ろに御回向を致しました。

大和尚は平成八年二月四日、世寿八十四歳にて御遷化されました。暦の上では春を迎えながらもまだ雪の残る中、亡き大和尚の御冥福を祈り、墓前に香を手向しました。

### 諍ひをのみ 捨ひけるかな

（関谷集）

（情けないなあ。ただでさえ苦しみが果てしなく広がっている人の世で、争いだけを拾って生きるのとは）

穏やかな季節が巡ってきました。ちよつと空を見上げれば、暖かな春風に揺れる「桃の微笑み」にきつと出会うことでしょうか。